

翻刻『曾我根元評判大全』

卷之拾七

凡 例

本文は底本通りに翻刻することを主眼としたが、読解の便をはかつて次の処置を施した。

- 1 句読点に相当するところは一字あきとした。
- 2 仮名は現行の字体に統一した。
- 3 片仮名「ハ」「ミ」「ニ」は捨仮名の場合を除いて平仮名扱いとした。
- 4 仮名の清濁については、底本にない濁点を適宜補い、補った文字の右に・を付した。
- 5 漢字は通行字体を用いたが、慣用字は底本のままとした。
- 6 反復記号は底本のままとした。
- 7 明白な誤り及びわかりにくい宛て字は適宜改め、底本の文字を振り仮名の位置に残した。
- 8 底本に振り仮名がある場合は、その振り仮名にへを付して7と区別した。
- 9 脱字は「」内に補った。
- 10 損傷等により判読不能の部分は、字数のわかる場合には字数分の□で、字数のわからない場合には□で示した。

翻 刻

後 藤 多津子

曾我根元評判大全 卷之拾七

本章

爰に 平家随一の臣 上総五郎兵衛忠光 悪七兵衛景清 并越中
 次郎兵衛盛副 彼等は万夫不当之勇士 平家譜代の臣下也 八嶋壇
 浦之戦に遁れ隠れ忍ぶは 臆病にあらず 会稽之恥すゝぎ 主君滅
 亡之仇を報じて本懐を達し 反覆の大功を思ふ 元来 平家嫡流は
 小松内府重盛の御子中将維盛 其子六代御前也 此六代御前未在世
 也 此若君を取立 平家再興の大望也 諸々流浪 就中 忠光 景

清 兩人は六代に尋逢不奉 盛副老人六代に尋逢て 深く忍べり

忠光 景清は是非に及ばず 歩卒下僕に成て 是非頼朝公を一太刀

可奉恨と深く忍び 鎌倉に有時に 永福寺建立人夫の中に入 相窺

へり 頼朝公見咎め給ひ 兩人面縛す 忠光 景清 荒言土法に非

ずと 六浦にて首を被刎 又 景清は明き盲と披露して 然も 武

勇凛々たり 依之 一命を助らんと日向国に流罪の時 真言受戒

句当と呼ぶ 此故に 日向句当清残と名乗 六代御前の断滅を聞届

往生 時に五十六歳也 平家譜代の臣下 忠義正道武士也

平家随一の家臣肥後守貞能 二には上総介忠清 三には飛騨判官

景家 四は越中前司盛俊也 彼等は頼光の四天王のごとき武勇智謀

の忠臣にて 不残忠死を遂にけり 其内に 上総介忠清は 嫡子は

上総五郎兵衛忠光 次男は悪七兵衛景清也 此兩人は力万人に秀れ

心鉄壁のごとき勇士也 八嶋壇浦にて遁れ去るべき人に非ず 併

父上総介忠清は 家嫡小松内府の寵臣也 維盛都を落給ふ時 御公

達六代御前 幼年故に都に残さるゝ 一家断滅之時は 汝兩人必戦

場を遁て 此六代が行衛を頼 兩人 越中次郎兵衛盛副に深く頼給

へり 故に 三人共に壇之浦之戦之時に 小舟に乗退き 大勇之者

故に 慕ふ敵あらずして 三人共に此浦を遁れ去れり 斯て 紀州

田辺浦に上り 五郎兵衛と悪七兵衛は 中将維盛那智山にて出家之

由を聞て 尋給ふといへども 維盛入道は熊野浦にて入水有しをば

曾て不知 熊野三山 国中を尋給ふ内 盛副は早々京を出て 六代

御前と母公御台所を同伴して 高雄の神護寺文覚上人を奉頼 深く

忍びたり 此趣を忠光 景清は曾て不知 其内に 源氏一統に成り

平家の落人を探す事頻り也 是非に不及 兩人隠れ忍び 流浪の身

となれり 然りといへ共 一念の猛勇はますく熾んなり

忠光景清鎌倉に忍事

忠光 景清は六代御前に尋逢て 如何成る辛勞しても 又天下反

覆之功をも謀るべしと 種々に心を尽せども 終に不奉逢 又盛

副都に上りし御供と見へじ 定て深山迷谷にも深く隠れしや 当来

らでは尋逢はん事は不定也 此上は 平家一類敵也 外人は何なら

ず 頼朝を一太刀恨んで 鬱憤を散ずべき也と 賤しき仲間歩卒に

成て 鎌倉に立忍ぶ 実には 竜虎の勢ひも何ならず 古語に 鯨

鯢物を離れて螻蟻に吸はるゝや 差もの猛き万夫不当之大力士なれ

共 今は世を忍ぶ落人と成 是かや 鯨大海に有ては 潮を吹き波

を返す 岡に上り 浅川に入ては 身の振り廻しも不成故に 螻

蚯 蛭に吸はれ 食物となり なぶり殺さる 実には 今は此兩人

の身の上と被知たり 既に年霜十年を過 年はふけ 其上に 昔の

姿のあらばこそ 貧苦に迫り 今は唯 路道之乞食非人の如く也

然ども 心底は昔の忠光 景清にて 猶々人の見咎る事もとやと

悪七兵衛景清は明盲となり 兄に手を引るゝ 又 五郎兵衛忠光は

魚鱗を片々の目に挟て すさまじき出目の片目に成 げにや世の人

非人と言ふも断也 今の世の日雇取やら 網川やら 乞食やら 少

駄賃銭を取て 鎌倉に入来り 由井が浜に小家かけて 兩人は海士

の内に入 夜に入れば 兄弟共に明白の眼也 人目之時は明盲 此

節を窺へり 近此恐ろしき兩人が心底也 げにや 鉄は七度焼返し

て鍛ば いよく最上の鉄となり 釘は四五度火にかけては必滅り

て無くなり 武士の心は唯鉄を鍛う如くなり

永福寺建立忠光景清落着之事

右大将頼朝公 先年 奥州義経追討之節 出馬有に 殊之外苦勞

に思はれ 諸神諸仏に願望あり 中にも 此度乱逆静り 天下一統

之時は 鎌倉にて一字の伽藍がらんを建立可有之旨 深く丹誠を抜きんで
 給へり 平治以後 折も此造営の事御沙汰有 漸今年 大倉が谷に
 造営始り 永福寺と号して 頻りに造立し給ひ まづ本堂 庫裏作
 事相済て 皆専御堂前地内の柳除 庭作り最中 方丈之庭に泉水有
 形のごとく造営あり 奉行は城四郎永持 佐野四郎広綱等也 頼朝
 公にも度々御成也 此庭の泉水に色々の名石共有 沼石 形石 姥
 石 紫雲石 荒磯石 大浜など 種々の名石有 皆壺丈程どの石
 也 凡 五拾人百人を以て持運はこぶげにや 又なき造営也 比は建
 久五年正月廿一日 頼朝公右造営の為 又は庭御物好のために渡御
 なりて 造営を御上覧 奉行 爰を先途せんじに相働く 此節 上総の五
 郎兵衛忠光 悪七兵衛景清兩人 首尾を相窺ひ 若間能んば 一太
 刀可奉恨と一念 又は 今日の命を助らんと 旁日雇人足の中に入
 勿論 衰へ果たる兩人なれ共 又外の人の可及所に非ず 其丈拔群

に秀れ 相形は大に荒 殊に貧苦に迫り 髪髭すさまじく 唯仁王
 のごとく 老人は片目の出目也 老人は明盲也 慥に盲人と相見得
 先成片目の人に手を引れて相働く 惣じて石を運び 土を拓き働く
 頼朝見給ひて 歩人足の労を憐れみ 彼の兩人の働き 何様不思議
 に思召といへども 大勢の内諸人なれば 又 兎角も不被仰 外の
 人は心を付る者もなし 只大将老人心を付 あの人夫之内に盲たる
 者兩人有 何様にも力量秀れたるや 土持石運び 無事の人には大
 きに増れりと斗の噂にて 其已後は方丈 泉水の大石とも 物好き
 共有て 石を片付かたらるゝ 其所に傍示を立らるゝ 面々石を動
 かすに 人夫数百人集り 大形に成て動かすといへども 思ふ様に
 成ざりけり 頼朝公頻りに御心に不叶 などや力士のなからん 近
 習の若侍 出て働き見よ 去年死失し曾我五郎なんど 又は 去り
 し真田与一い杯か 某か 義経が臣下佐藤兄弟 伊勢の三郎など居た

らんには安かるべきに 思ふ儘にならぬ世の中と被仰けり 此様子を承り 此度奉行役 鎌倉にて大力量の名に呼ばれたる佐野四郎大井次郎 城四郎三人 衣紋かい取て 肌襦袢ちばん一つに成り 御庭に出て 雑人原が働きははかどらず 如何成石も 我々三人出れば 御上覧御心に可叶と 彼六尺余り有ける沼石 形石 二つは只三人にて 上覧に叶様に自由に片付たり 頼朝公大きに御機嫌能 誠に勇力無双と感心し給へり 爰に 布袋石とて丸ふくらなる大き成丸石 三人にて動きはすれ共 中々持運はこぶ事不叶 然る時に 畠山重忠見給ひて 頼朝公の御慰と云 且又 仏地霊場と云 大勢の辛勞に成り 然も其功なし いで 二位殿の御心に叶様に 場所を承り 届て可仕と 直垂取て捲り上□ 小袖小短こくすこやかに出立給ひて 彼之布袋石を引かへて胸に付 池の内を自由に彼方此方に振り廻さるゝ 誠に人間の所業とは曾て不見 然る処に 紫雲石

と云石あり 其丈壺丈に余り 横五尺 厚サ四尺程も可有之 手懸りは所々に有といへども 秀すぐれて大石故に持あぐむ 凡 是は百人余が懸りても動かし難き大石也 畠山殿申は 一方は我可持也 何とぞ□むかふ相手の有まじきやと被申故 当時鎌倉にて大力士と呼らるゝ城四郎 大井次郎 佐野四郎 最初に沼石 形石片付けたる面々なれば 相心得候と 三人向に廻るゝ 畠山殿被申は 各三人□と持給へ 跡は重忠可仕と 和国随一の畠山 男衾と名取の大力士彼の石を引かへ 片端を上らるゝ 向三人 上る事は上たれ共一寸も歩行事不叶 働かれず 上げたる斗にて何の益あきなし 此故に又もとの所に下に置たり 頼朝公御□□□ 畠山に相当の人は無之共 三人にて不叶は 天晴重忠は日本無双之剛力と感おじ給へり 頼朝被仰出は 斯様之事は又有がたし 哀 頼朝が力量あらば 畠山が相手に可成ものを た□奉行頭人 急ぎ下郎之内 誰人□にても

大力量可有や 如何にして下僕の日雇成哉と 憎まぬ人こそなかり

けり 其時 頼朝公 此兩人に子細あり 可糾明とて □□御幕近

く来れと被仰出けり 忠光 景清日天を心中に拝して 誠に多年の

本懐と□ 時に□ 仮令^{たとへ}百万人の中にも 何とて□□□や 弓

□ 今此時と 杖にすがり 御前近く□□□□

兼而 御心に懸りける程に 四方に諸士□□□□ばかり 遠くに

□差置たり 此故に 兩人も暫く□□たり 時に頼朝公 城四郎

佐野次郎に命じて 彼の兩人の盲^{めくら}の杖召□るゝ 曾て差上ざるに付

畠山に立合□□□の仰 重忠畏て此所に立出 如何に兩人 仮令^{たとへ}

勇猛獅子王の働き有ても 今此首尾及んで 何とて可叶や 是非^{ぜひ}に

不及節也 重忠に見せ給^{たま}へと □後より手詰 □候也 二相^{ふたへ}

を證□重忠也 第一 兩人の □有て被□□ 景清は唯一工

夫して 今は□□んと思へども 誠に天命也 斯上 心を□処 見

顕され 大勢に取巻れ 不叶上に無面目事 さあらぬ躰にて 盲人

の杖は男の魂なれば □おとしにて 刀と申にては無□候 差出た

り 忠光は懷中巻尺五六寸の小刀 相ともに重忠に相渡す 畠山受

取 三浦 和田 下河辺 土屋大勢ひ集り 見るに □□つたはる

家の重代小烏丸也 扱々 尋常之者にあらずと言 頼朝工夫まし

く 彼等兩人は盲 □有 強く吟味も入ざる事 我心向

□に近く出し候得と 御目通近々と被召出 如何に上総五郎

兵衛 悪七兵衛 久々にての対面□□ 我□歳之時は汝原并歳前後

若殿原 小松殿の御側に伺公せり 其顔色に見覚有 又如何に西国

の合戦に命を落し 今此所迄来り 頼朝を狙ふぞや 其心底如何と

尋給^{たま}ふ 忠光申条々は 西海にて討死せざる子細はあり いわれざ

る事の御尋 其上 上総の五郎兵衛に□□□ 此所に忍は 既に十

年に余り 只頼朝公を一太刀討て 平家の一門の鬱憤を晴さんと思

ふ斗也 口惜くも 斯^か様に顛れて候 疾くく首を刎 我々が忠義

を立給へと 大音にて申 其時 頼朝の仰には 汝原には大恩有主

人六代御前 文^学覚上人の命乞に依て助置たり 然ば 命を繼の本意

有 如何に頼朝を狙ふや 其時に急ぎ申はいやく 近年見るに

頼朝の志慈愛の心入も無し 謀斗也 悉くに殺し 六代御

前も殺しなん 何条左様之□に謀らるべき忠光に非ず 最早 憂世

に尽果たり 見咎められしは本望と 不被奉 早く首打給べき也

果報の頼朝也 前方 伊豆に流人の時 殺すべき者を 天晴残念後

悔 今の仕合等 思ふ儘に悪言す故に 不興思召て御退き 武蔵国

六浦にて首を被刎けり 忠光退去の跡にて 景清を召れ 汝も申訳

有哉と尋給へり 景清申は 仮令有て 兄忠光同口と被思□□ 今

の事も 頼朝尋給ふは 汝 誠の盲人成哉 景清申は 眼の見ゆる

は肉眼也 仮令眼は見へず共 心眼は明白也 其時 六代御前世に

有 文^学覚命乞之事を被仰聞 景清 扱は□説也 六代露頭之□は運

命是まで也 踰々六代に逢ひ不申候 人隠□給ふ内は 頼母敷志を

も立候 不叶事も能□□仕たりと 神妙に悪言もなし 頼朝不便に

思召て 景清は命を助 日向国目白流刑申べし 盲人なれば 再び

眼力を用ゆる事不可叶 汝が願ふ所は 定て 六代に奉仕すべき願

成ん 不可叶 又 時節もあらず 可免許 疾くく日向に下り

出家すべき也と 頼朝の下知にて 真言宗阿闍梨 句当に成 日向

に下りけり 武勇智謀兼備の武士也 六代一生の間は無事居たり

六代御前死去之旨を聞て 断食して死せり 景清を盲人祖と云ふ

左様に不非 盲人にてはなく句当 検校之官は真言宗の官位也 景

清 西国下向の時は 眼之鱗も取りたり 古今無双の一筋に忠義之

厚き武士也けり

付記

資料の閲覧に際して御高配を賜りました宮崎県立図書館に、

厚く御礼申し上げます。